目的意識の醸成を目指した組織的な取組の開発的研究 -自分への信頼を高め自律的な学びを生み出す仕組みの構築を通して-

高度学校教育実践専攻 教育実践力高度化コース 実習責任教員 久 我 直 人 実習指導教員 芝 山 明 義

川 村 誠 司

キーワード:自分への信頼 目的意識 被受容感 生徒自治

I 課題分析

1. 課題設定の理由

(1) 実習校の概要と課題

1) 実習校の概要

実習校は、農業高校と商業高校が再編統合された新設の全日制高校である。専門高校として商業、農業の専門性を活かした教育活動が展開されている。それぞれ培ってきた商業教育、農業教育を継承するとともに、食の安全・安心の観点からの教育を加え、商・農併設のメリットを活かした教育を展開している。生徒数は、15クラス(5クラス×3学年)390名、教職員数73名(平成27年5月現在)の中規模校である。

2) 実習校の課題

生徒・教職員・保護者対象のアンケート結果 を中心に学校アセスメントを実施した。表1は、 抽出された課題を分類したものである。

表 1 実習校の課題の分類

		学習習慣の未定着
生	行動面	学習意欲理解の低さ
		夢・目標が十分に設定できない
徒		夢・目標の達成に向けた努力不足
//C	内	自分への信頼の低さ
	内面	被受容感が少ない
教		学習定着に向けた支援の不足
職員		生徒の成長への認知が低い,個業性

生徒の行動面の課題と内面の課題の構造的な関係を理解するために、生徒アンケートの結果

を共分散構造分析ソフト Amos で分析した。「生徒の意識と行動の構造」を可視化し、生徒の行動と内面の関連を導き出した(図1)。

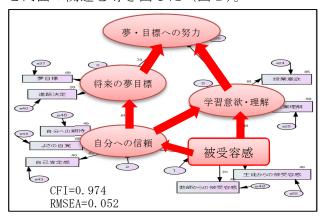


図1 生徒の意識と行動の構造図

(2) 実践研究の目的

それぞれの課題に対して個別に取組を講じるのではなく、学校全体の課題として捉えて効果を生み出すように取組を展開する必要がある。 生徒が抱える教育課題解決に向けて、効果のある指導を組織的に実践することを通して教育改善(生徒の変容)と教職員の組織化を同時に具現化することを本実践研究の目的とした。

(3) 実践研究の課題

本実践研究の目的を達成するために,次の四つの課題を設定した。

- ① 実習校の抱える教育課題の可視化
- ② 組織化と教育改善を実現する教育改善プログラムの構築
- ③ 構築したプログラムの展開による組織化と 教育改善に向けた実践

④ プログラムの効果性の検証

2. 実践研究の枠組み

(1) 実践研究の具体的な取組

課題解決の方向性に沿った具体的な取組を実習校生徒の意識と行動の構造図(図1)に重ね合わせ,具体的な取組を策定した(図2)。

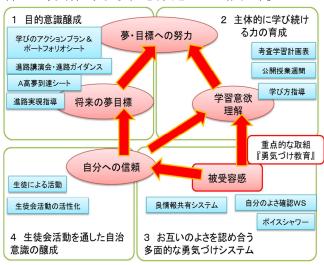


図2 具体的な取組図

生徒の目的意識の弱さを改善するための取組 で,進路講演会・進路ガイダンスを活用した意識 づけや、「A高夢到達シート」や「学びのアクシ ョンプラン&ポートフォリオシート」のサポー トツールを導入し活用することとした。主体的 に学び続ける力の育成に関する取組で,学習習 慣の確立をねらいとした「考査学習計画表」の 導入,「学び方指導」の実施,生徒の主体的な学 びをモニタリングする「公開授業週間」を計画 した。自分に自信がもてていない生徒が多い実 習校にとって勇気づけは,自分への信頼を高め るために、そして多くの課題の基底となる要素 を改善するための重点的な取組である。教職員 による「ボイスシャワー」の実施や「良情報共 有システム」の稼働,生徒—生徒間でよさの発見 や勇気づけが期待される「自分のよさ確認ワー クショップ」などを計画した。生徒の自治意識 醸成に関する取組として,生徒会活動の活性化

や生徒による活動で学校を良くしていこうとす る場の設定を計画した。

(2)組織マネジメントの展開枠組み

本実践研究を実施するにあたり、「教師の主体的統合モデル(久我 2014)」を基に、組織的マネジメントの展開枠組みを作成した(図3)。

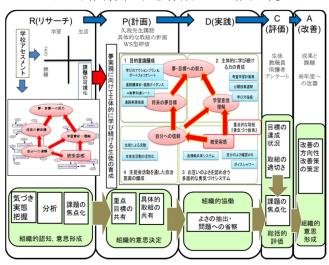


図3 実践研究の展開枠組み

Ⅱ 課題解決

1. 実践研究の実施

(1) Research 期

平成27年12月26日に校内研修会を実施した。 内容は、①久我教授講演②学校アセスメントデータの共有③組織的省察(ワークショップ型研修)の三つである。組織的省察では、生徒の実態と課題の共有がされ、それに基づいた課題改善のためのアイディアが出された。平成28年2月17日に、卒業を控えた生徒(旧生徒会役員)による組織的省察(卒業生によるワークショップ)を行った。生徒が高校生活を振り返る中で感じているよさや課題を焦点化し、生徒の意見を取組策定につなげることを目的とした。教職員、生徒から出てきたアイディアや意見を取組の参考とした。

(2) Plan期

組織的省察の結果を踏まえ, 実習校の現状の

捉え,課題解決の方向性から具体的な取組を決定した。その取組が組織的に展開されるように,1年間を6ステージに区切りストーリー性を持たせた。さらに,各取組に対して担当分掌を位置づけた(図4)。

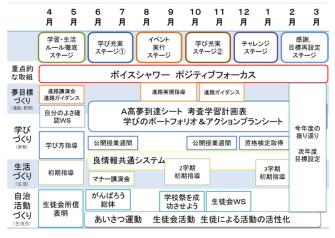


図4 組織的展開イメージ図

(3) Do 期

1)目的意識醸成に関する取組

【 A 高夢到達シート, 学びのアクションプラン &ポートフォリオシート】

よさの自覚や目標設定に基づいた計画的な学びへ誘う目的意識醸成を促進するサポートツールを導入した。生徒から「目標の設定ができた」、「実現に向けた努力をしたい」、「自己を見つめ直し、その改善を目指す」といった意見が多くあり、目的意識の醸成が促進されたと推察される。

2) 主体的に学び続ける力の育成に関する取組 【考査学習計画表】

考査学習計画表は、定期考査時間割発表(考査1週間前)に配布した。中期目標を踏まえ考査全体についてと、各教科の目標と学習計画を設定し、記入するようにした。担任から、「学習習慣の確立に繋がっている」という意見が多くあり、主体的な学びを促したと推察される。

3)お互いのよさや頑張りを認め合う多面的な 勇気づけシステム

【自分のよさ確認ワークショップ】

生徒がグループ全員についてよさを記入した カードを交換していった。生徒の感想には、嬉し かった、自分のよさを将来に活かしたい、友達の よさを書けて嬉しかったという意見が多く、生 徒の被受容感の高まりが推察される(図 5)。



図5 自分のよさ確認ワークショップの様子 4)生徒の活動を通した自治意識の醸成

生徒会ワークショップを実施し、生徒による 課題改善に向けた取組を策定した。「あいさつを しよう」をスローガンに生徒会が主体となって あいさつ運動を展開した。生徒会役員は取組の 手ごたえを感じ、自信を高めたことが捉えられ た(図6)。





図6 生徒会の所信表明(左)あいさつ運動(右)

5) 協働を促進するための取組

【学科を横断した教育活動を通した生徒,教職員の協働の活性化】

異なる学科のお互いのよさを認め合うことで 自分への信頼を高めることを目的とした、学科 を横断した教育活動を実施した。1 学年で、全学 科による田植え実習が実施された。農業科生徒 が指導者となり、商業科の生徒に教えて田植え を行った。多くの教職員もともに取り組んだ。 生徒がお互いによさを認め合うこと、教職員の 協働が促進されていることがうかがえた。

2. 実践研究の総括

(1) 生徒の変容

本実践研究の結果,夢目標への努力,夢・目標の設定,学習意欲理解,自分への信頼,生徒の自治意識の各項目で高まりが確認された(図8)。

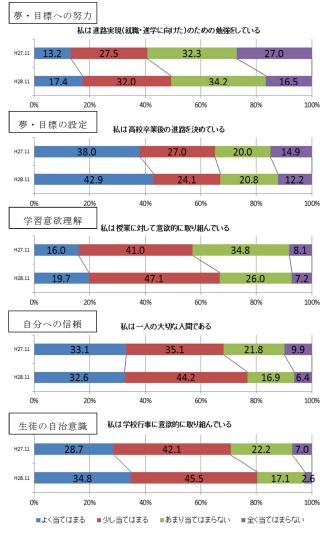


図8 生徒アンケート結果

(2) 教職員の変容

教職員は授業支援の高まりが捉えられ、生徒の学習意欲理解の向上に繋がった。また、生徒の成長への認知が高まり、生徒の自分への信頼の高まりに繋がった。そして、教職員の協働性の高まりも捉えられた(図9)。これらは、全教職員で教育課題を共有したことが要因の一つであると推察された。

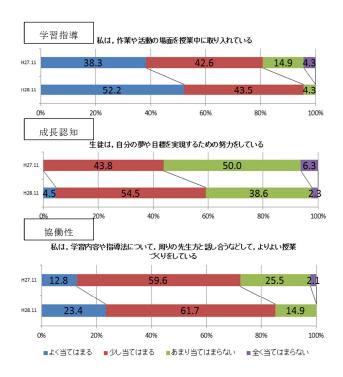


図9 教職員アンケート結果

(3) 実践研究の成果

本実践研究の成果として,次の7点があげられる。①重点的な取組である生徒の被受容感に高まりが確認できたこと。②多くの課題の基底である,生徒の「自分への信頼」の高まりが確認できたこと。③学習意欲,学習理解が向上したこと。④生徒の目的意識が醸成されたこと。⑤生徒の自治意識が醸成されたこと。⑥教職員の指導の質的改善が図られたこと。⑦教職員の組織化が促されたこと。以上の成果から,本実践研究の目的は一定程度達成されたと捉えられた。

(4) 今後の課題と展開の可能性

本実践研究では、教育課題の基底を「自分への信頼の低さ」とし、「勇気づけ教育」を核として取組を展開した。生徒の諸問題(行動レベル)の解決を目指すとき、直接的な改善策だけを講じるのではなく、意識(内面レベル)にも着目して改善策を講じることの有効性を示したといえる。本実践研究で設定された取組は、どの学校においても汎用の可能性があると捉える。